

小岩田昔ばなし

笹本ふみ

手接橋

昔、お寺（如宝寺）に寺男の作兵衛という爺さんがいて、毎日、寺の田圃の耕作をして居りました。

その日も仕事が終わって、一緒に働いていた馬を前の川のおわか橋へ洗いに連れていき、「どうも、今日のご苦労であった」と、馬を良く洗い清めて寺へ帰ろうとして、馬の手綱を引いて歩き出そうとしたが、馬が少しも動かない。どうした事かと思い、馬をよく見ると、大きなカップが馬の尻尾を引っぱって居りました。怒った作兵衛は、持っていた鉈でカップの手を切り落してしまいました。

その夜中のこと、作兵衛が寝ているとトントンと戸を叩く音がします。目をさました作兵衛が外へ出てみると、カップが泣きながら「今日は悪いいたずらをしてすみません、どうか、かんべんして下さい。手がないと泳げなくて困ります」それで可哀想に思い、馬の尻尾についていたカップの手を返してやりました。

それから毎夜、作兵衛の処へ魚が届けられる様になりました。カップが届けてくれたとのこと。お寺ではその魚を村人につぎつぎに配りました。何年かすぎた後、ある日、カップからぱったり魚が届かなくなってしまいました。これは、カップが死んだのではないかと、村人がおわか橋に行ってみると、大きなカップが死んで居りました。可哀想に思った村人はカップをねんごろに葬り、お祭りをしました。それが今、加宝寺にお祀りしてある“手接様”です。その後、村人は勿論、遠く

五里も先から毎年手足の悪い人、手芸の上達したい人等、沢山の人がお参りに来ました。

丈夫な手になる様にと、ブリキの手形や手袋、糸、キリスネ等を上げて、ご利益を頂きました。信者はそれらの品のどれかをお借りして帰り、なおりましたら新しいお礼をつけてお返しにきます。

西田大将

市内小岩田西一丁目の東の隅に、西田大将一家のお墓があり、石塔や、石佛が沢山お祀りしてあります。西田大将の西田は、小岩田の西の田圃故、西田という地名ですが、西田大将の家には常に50~60人の人が全国から集まって居り、その人達が、大将の命で、各村村の番人となり、派遣されていたのです。

お寺の過去帳にも、手野村や、木田余などへ行って番人をしていた人が、老いて働けなくなると、大将の所へ帰り、そこで亡くなったのがわかります。過去帳に、何人もの立派な戒名が、西田大将家来と書いてあります。

西一丁目の老人会の人達は毎年、春の彼岸会には、お経をあげ懇ろに供養しています。きけば明治の末まで西田大将の大きな家があったとのこと。

おみたらし

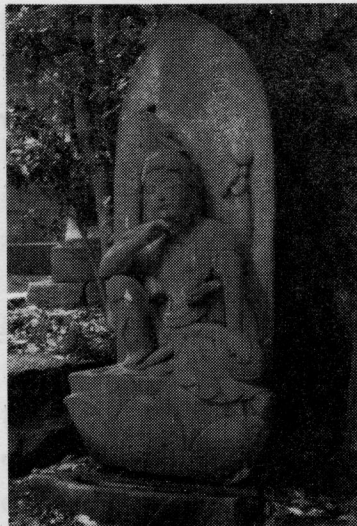
小岩田村は大岩田小学校から6号国道までが小岩田地先であります。各所にお堂を建て薬師様など、たくさんのお佛様が、まつられていました。その中にみたらし薬師があり

ます。日大高校と土浦——竜ヶ崎線の間
あり、主に目の佛様ですが、無病息災を祈り
ました。一名、つるし薬師とも呼ばれて居り
ました。信州大学には今でも資料があります。
コンコンと清水がわき出ていました。それは
霊水で眼病が治り、眼が非常に美しくなると
いわれ、遠くからもたくさんの方が、お参り
にきました。眼病が治ったお礼にウナギを持
って来て、そこにはなす習わしがあり、ビン
に入れて持参しました。そのウナギが田圃に
出て大きくなっても、誰もそのウナギをとっ
て食べる者はありませんでした。

このウナギは薬師様のお使いだといわれて、
その霊水を“おみたらし”といわれて、つい
この間までありましたが、今は埋めたてられ
てしまい、薬師様がお寺に祀ってあります。
先年、筑波大学の長谷川先生がお見えになり、
千二百年前の乾漆造りの特徴がよく現れてい
るといわれました。つい最近まで、その水は、
何軒かの生活用水に使っていました。

木食上人

享保年間に村の矢口平兵衛という家から盛
辨上人という人が出ました。その人はお寺の
盛珊上人の弟子になったのです。盛辨上人様
は修行して人々を助け、病気の人を治してや
り、人々の願い事を成就させたりしました。
修行は、五穀を断ち、すなわち米、麦、アワ、
キビ、豆、を一切食せず、木の実、カヤの実
などを食べて身を清浄にしての大変な修行で
した。その行が成満して、悩める人々を助け
たのです。村人はもちろんのこと、全国を回
って歩いたのですが、村に帰り、お大師様の
様に定に入るから穴を掘ってくれというので
す。村人はずい分とめましたが、穴に入りま
した。その時、竹のフシをぬいたのを穴の中
に下し毎日、水を上から入れてもらい、中で



六臂の石
造如意輪
観音像

(大岩田町)

鈴を振っていました。一週間は鈴の音がして
いましたが、その時、音が絶えてしまいました。
つまり七日間生きていたこととなります。
入定とは、お大師様が行った事で、その後を
したい同じ道をとりました。村人は土をかけ
てお参りし、諸国回国木食盛辨の霊地と石碑
を立てて供養しておりました。その碑も今は
寺におまつりにしてあります。

おわか橋

昔は、お産で亡くなる女の人が多かつ
たものです。お産で亡くなると、村の女達や
家族の者は、2度とそういうことがない様
にと、この橋で流れかんじょうをして死者の
霊を弔らい、式を行いました。そして一生
懸命地蔵様を拝みました。そのお地蔵様へ
のお経は「オンカアカアビサンマエイソ
ワカ」とおそなえます。そこでいつのま
にかこの橋をオワカ橋と呼ぶ様になりました。
この橋も、今は残念ながらありません、
農地改善で、川の形も変り、オワカ橋
もなくなりました。私が子どもの頃は七
夕様を流しに行ったり、髪を洗いに行
ったりしました。なつかしい所でした。

中国作家 霞ヶ浦の水を見る

寺田 章

中国作家協会の代表団は、団長の暁凡先生、団員の鳳章先生、同じく陳喜儒先生の三名。団長の暁凡先生は詩人で中国作家協会遼寧省分会の副主席でもある。団員の鳳章先生は中国作家協会江蘇省分会の專業作家で、先生の作品は日本語に翻訳され出版されている。団員の陳喜儒先生は中国作家協会対外連絡部の副所長で通訳でもある。

7月3日

今日は、土浦の自然を守る会の奥井登美子会長と、事務局の原田伸子さんの案内で霞ヶ浦の「水」を視察する。

「童話館」で午前10時に会うことになっている。また、霞ヶ浦の「水」の汚れに強い関心を持っておられる、須田ひささんと、スーパーマーケット「セイミヤ」の加藤栄一社長が、中国の先生たちと、一緒に「水」を見たいと待っていた。また中国の薬用植物研究者の張蔭隣（チョウインリン）さんが、筑波学園の国立衛生試験所筑波薬用植物栽培場から、奥井さんの連絡で駆けつけてくれ、視察に同行してくれる。視察後に昼食をしながら、交歓会をしようとのことで、簡単に自己紹介をし、童話館を出る。

観光遊覧船に11時に乗ることになっているとのことだ。私は、自動車に走り、出発の準備をする。ところが車に乗った中国の先生たちが暁凡先生を心配そうに気遣っているようす。

聞くと店のドアに指を挟み、指先から出血し

ている。応急手当をした。

急ぎ、船乗り場に行くと、11時を過ぎ、遊覧船は出航し200メートル程を先を走っていた。私たちの姿に、気づいた黒田船長が親切に船を大きく旋回しもどってきてくれた。中国の先生たちに、よい光景を見てもらった。大変うれしいことだ。乗船していたお客たちも、気持ちよく、中国の先生たちを迎えてくれた。

奥井さんが船長に、中国の先生たちは霞ヶ浦の「水」の視察に来られたと伝えたようだ。船長が、マイクで歓迎の挨拶をし、また、乗船客には、中国の先生たちの目的を説明し、航路の変更と、時間の延長を伝えた。乗船客の皆さんも、笑顔で了解してくれた。

中国の先生方は、霞ヶ浦の周囲を見わたし、湖水を見る。無言である。この湖水を囲む、広域市町村の人々が、この「水」を飲み水にしていると説明をする。先生たちは、また湖水を見る。この湖水は、逆水門で閉された、流れることのない「水」である。この湖水には、一部は浄水場を通過するとはいえ、人間、家畜の尿尿、家庭雑排水、洗剤水、その他の汚水が、流域河川から流れ込んでいるのは事実である。中国を流れる大河の褐色の水と、激しさには、自然の力と豊かさを感じるが、なぜか、この淀んだ湖水には、生気を感じるができない。

一漕の舟が漁をしてる。先生たちを乗せた遊覧船が、漁船に平行して止まった。漁夫が網をたぐりあげている。先生たちは、湖面の

網を凝視する。互いに言葉を交わしながら、また視る。指差しする。驚きのようだ。引き上げる網いっぱいのヘドロが、まるで固まりのようにへばりついている。漁夫は網を上下、左右に湖水にゆする。

この地球の窪みに、自然は「水」を満々と湛え、ここに人々は、自然と共に生きてきた。ところが人間は己れの欲望のために進歩、発展と称し、この湖水を変えてしまった。人間共の云う進歩、発展とはやがて、大きな罪悪にかわるまいか。

巨大なコンクリートの建物が目前にせまってくる。湖岸の丘に建つなんとも異様なビルディングは、稲敷郡美浦村にある、米国企業の「日本テキサス・インスツルメンツ社」先端技術産業のIC製造工場である。奥井さんが、中国の先生たちに、工場と湖面を指差しながら熱心に説明している。先生たちは、無言で大きくうなずいている。須田さんや、加

藤さんは、首を小刻みに横に振っている。

隣国の中国では、四つの近代化を進めている。その一つである産業の近代化は、大きな目標のようだ。先生たちにはこの情景が、進歩か、破壊なのか、どちらに映るのであろうか。

この工場の真下の湖面に、飲料水の水道水取入口があるのだ。遊覧船は、養殖漁場を見ながら、充分、霞ヶ浦の「水」を見せてくれた。

先生たちは、同行して下さった、張先生と、なつかしように話しをしている。仕事の話それとも故郷の話？

奥井さんの自宅では、昼食の用意をして、待っていてくれた。先生たちを囲んで、ビールと果実酒で歓迎の乾杯をした。手造りの料理に、みなさん感激していた。奥井さん、原田さん、お世話になりました。

(会員)



霞ヶ浦の水視察エン
ゼル号内で

1987. 7. 3

第二回水郷水都全国会議報告

22号でお知らせしました第2回水郷水都全国会議が、土浦市で開催されました。新聞等で報道されましたのでご存知だったと思います。全国からの参加者も多く活発な論議が交わされました。会議の内容は「第2回水郷水都全国会議の記録」に掲載されておりますが、その中の霞ヶ浦に関する部分を掲載いたしました。

—水文化の再生をめざして—

〈アオコ河童からの提言〉






と き 1986年9月6日
と ころ 土浦市民会館
主 催 第二回水郷水都全国会議

(カット 小林恒吉氏)

第2回水郷水都全国会議プログラム

1. テーマ 水文化の再生をめざして -アオコ河童からの提言-
2. 日程 1986年9月6日(土)7日(日)
3. 会場 土浦市民会館, 水郷体育館, 国民宿舎水郷, レストハウス水郷

日	時	プログラム
9 月 6 日 (土) 会	 午前	★船による霞ヶ浦視察(自由参加) 講師 高村義親(茨城大) エンゼル号 安田八十五(筑波大) 黒田船長
	12:00	受付開始 〔全体会司会〕須田 義之(土浦青年会議所) 志村 宗司(桜村民の会)
	13:00~13:30	主催者あいさつ……………木原 啓吉(実行委員長, 千葉大学) 基調報告……………佐賀 純一(土浦の自然を守る会, 医師)
	13:30~14:30	霞ヶ浦からの報告……………座長 田谷 利光(土浦協同病院 農村健康管理センター所長) ◇商人の立場から 報告者 保立 俊一(土浦の自然を守る会) ◇漁業者の立場から " 桜井 謙治(出島漁協) ◇農業者の立場から " 岡田 行雄(出島農協) ◇霞ヶ浦の地勢および " 原田 泰(霞ヶ浦をよくする市民連絡会 開発の状況 議) ◇市民運動 " 奥井登美子(土浦の自然を守る会)
	14:30~15:00	宍道湖・中海からの報告……………竹下 幹夫(中海・宍道湖の淡水化を考 える会事務局長)
	15:00~16:00	全国各地からの報告……………座長 人見 達雄(ソーラーシステム研究会・東 村山保健所) ◇柳 川……………報告者 広松 伝(筑後川水問題研究会副会長) ◇東京・下町 " 村瀬 誠(ソーラーシステム研究グループ) ◇東京・三多摩 " 矢間秀次郎(三多摩問題調査研究会会員) ◇利根川上流・足尾 " 布川 了(渡良瀬川研究会代表幹事) ◇瀬戸内海 " 後藤 安子(瀬戸内の環境を守る連絡会) ◇手賀沼 " 木原 葉子(ひとつぶの種代表) ◇琵琶湖 " 森岡 孝枝(大津生協理事) ◇富 士 " 渡辺佐一郎(富士市下水道課)
16:00~17:00	討 議	
		市民会館から交流会場へは, 霞ヶ浦を見ながらバスで移動いたします。
交 流 会	18:30	アトラクション (霞ヶ浦帆曳唄 霞ヶ浦帆曳唄保存会) (筑波山 ガマ 口上 岡野寛人) (将門ばやし 土浦将門囃社中) 〔司会〕矢間秀次郎(三多摩問題研究会) 岩波 嶺雄(土浦青年会議所)

日 時		プ ロ グ ラ ム	
9 月 7 日 (日)		6:00～7:30	★早朝観察会，霞ヶ浦 (国民宿舎水郷附近の水辺の観察) 講師 後藤 直和 (土浦の自然を守る会) 五木田悦郎 (常総学院高校)
	分 科 会	9:00～12:00	◇第1分科会 霞ヶ浦の再生は可能か—湖沼再生論 責任者 原田 泰 (土浦の自然を守る会) ◇第2分科会 都市の水循環 責任者 村瀬 誠 (ソーラーシステム研究会・向島保健所) ◇第3分科会 農・漁村の水循環 責任者 柏村 忠志 (土浦のまちづくりを考える会) ◇第4分科会 地域活性化と水質浄化 責任者 志村 宗司 (桜村民の会) ◇第5分科会 市民の手による水質調査 責任者 森 保文 (霞ヶ浦をよくする市民連絡会議水質調査団) ◇第6分科会 水とどうつきあうか 責任者 大和 安 (生命のために行動する会)
		12:00～13:00	昼 食
	全 体 会	13:00～15:00	司 会 雨谷 昭 (土浦のまちづくりを考える会) 福田 正明 (松江市市議) 須田 義之 (土浦青年会議所) 分科会報告 全体討論 霞ヶ浦宣言 渡部 通恵 (淡水化に反対する会) 特別決議 原田 伸子 (土浦の自然を守る会) 閉会あいさつ 村瀬 誠 (ソーラーシステム研究会)

主 催 第2回水郷水都全国会議実行委員会

実行委員長 木 原 啓 吉 ('84 世界湖沼環境会議第三分科会議長)
 副実行委員長 佐 賀 純 一 (土 浦 の 自 然 を 守 る 会 , 医 師)
 " 田 谷 利 光 (土浦協同病院農村健康管理センター所長)
 " 村 瀬 誠 (ソーラーシステム研究グループ)
 事務局 長 奥 井 登美子 (土 浦 の 自 然 を 守 る 会 , 会 長)
 事務局 〒300 茨城県土浦市中央1-8-16 奥井方
 TEL 0298 (21) 0260
 郵便振込口座 宇都宮5-36470 「第2回水郷水都全国会議」

第二回水郷水都全国会議 全体会

—— 第1日目 ——

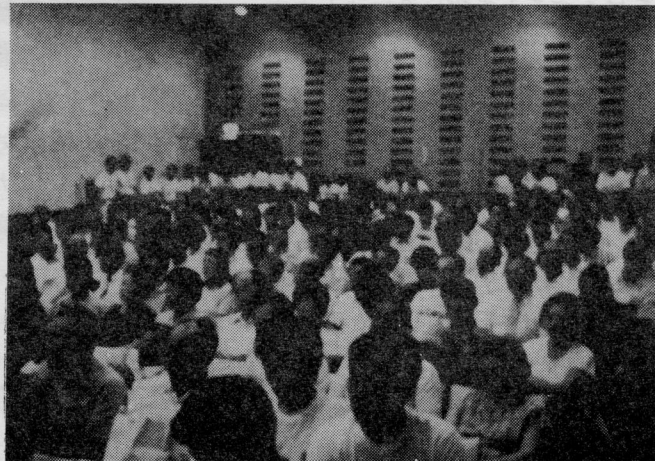
と き 1986年9月6日(土) 司 会 須田 義之(土浦青年会議所)
13:00 ~ 17:40
と ころ 土浦市民会館小ホール 志村 宗司(桜村民の会)
参加者 450名



全体会

全国各地からの報告者

市民会館小ホールを埋めつくした参加者
いすが足りず立っている人も多かった。



主催者あいさつ (要旨)

実行委員長 木原 啓吉

「第二回水郷水都全国会議」を環境破壊の激しい霞ヶ浦湖畔の土浦市で開くにあたり、全国各地から多くの方が御参加下さったことを実行委員を代表して深く御礼を申し上げます。また、第一回会議開催地松江から130名もの方々が遠路はるばる参加されたことに深い感動を覚えます。

この会議は、1984年夏、大津市で開かれた「第一回世界湖沼環境会議」の席で開催が決まったものです。この世界会議は、住民・研究者・行政関係者の3者が初めて一堂に会し、世界的規模で進行する湖沼の汚染問題について討議し、対策を話し合う会でした。そのときの「琵琶湖宣言」で「湖沼は文明の症状を映す鏡である。我々は未来の人類のために湖沼を健全な姿で次代に伝えていかねばならない。」と宣言しました。そして、住民・研究者・行政担当者がそれぞれの立場で全力を尽くすことを誓い合いました。

この宣言の精神に基づいて日本版の湖沼環境会議を開くことが決まり、その第一回が昨年夏、松江で開かれました。そこで採択された「松江宣言」で「親水権」ということが初めてうたわれました。これは「入浜権」と

同じように環境権の一環をなすものであり、住民の間から生まれた思想で、それを具体化しようという権利を形成するための宣言です。

そして、今年の5月、米国ミシガン州マキナック島で「第2回世界湖沼環境会議」が開かれました。私も日本代表団の一員として参加し、「第一回世界会議」をきっかけに、「水郷水都全国会議」がスタートしたことを参加者に伝えましたところ、各国の人々が感銘深く聞いていました。

今回、第二回会議を開くにあたり、地元の方々のご苦労は大変なものでした。何回も徹夜の会議を開いて問題点を絞り、分科会の論点を決めました。その内容は、会議資料の中に詳しく述べられています。私も熟読し、非常にレベルの高い資料ができたと思っています。

今日・明日の2日間、全体会・分科会・交流会を通じて、各地で水環境の問題に取り組んでおられる方々が、自分たちの体験・思想の展望を話合うことによって、共通の目標を目指して頑張る仲間意識をかきたて、今後の運動がさらに展開することを期待しています。

(ナショナルトラストを進める全国の会、
千葉大学)

霞ヶ浦のロボット化

佐賀 純一（土浦の自然を守る会）

環境汚染は世界的規模で進行しつつあります。いたるところで大規模な開発が地球を根底から覆そうとしています。殊に湖沼・河川の生態系の破壊は著しいものがあります。したがって、この問題の解決は現代に生きる私達すべてに課せられた重大な責務です。しかし、それには非常な困難を伴うであろうということも否めない事実です。なぜなら、水の問題は人間生活と密接に関係しており、さらに私達のものの考え方と不可分に結びついているからです。したがって、湖沼・河川の問題を論じる場合、単に汚いという現象を批判するだけではなんにもなりません。私達は、私達の水に対する考え方、すなわち水の哲学にまで足を踏み入れなくてはなりません。そこで、この基調報告では私達が準備段階で話合った中から、水と人間との関係をどのようにとらえたらよいのか、また、何をしたらよいのかということに関して共通認識に達した部分を中心にお話ししたいと思います。

その前にまず、なぜ私達がこのような会議をここで開催することになったのか、簡単に説明したいと思います。それは、この経過を述べるのがこの会議の性格を理解していただくためにも必要と思われるからです。

昨年、松江で第一回の会議がありました。そして、その場で「第二回は霞ヶ浦でやってくれないか」という要請が木原委員長から土浦の自然を守る会奥井会長にあったわけですが、その話を聞いた私達は初め非常に不安でした。というのは、私達は非常に平凡な市民

の集まりで、組織された力はありません。また、会議開催のノウハウは一切持ち合せていません。それ以上に、大変貧乏所帯です。機関誌を一冊発行するとあとはスッテンテンという有様で、こんな会がいったい全国会議など開けるのかということがまず第一の心配点でした。

それに、霞ヶ浦の汚染という問題は非常に慢性化・日常化しており、人々の心がかなり湖から離れています。水道の水がまずい、あるいは臭いといったことが、わずかに水の問題つまり湖と私達の日常生活をつなげているにすぎないといったなさけない有様だと言っても過言ではないのです。ここが宍道湖・中海あるいは琵琶湖と根本的に違う状況です。このような精神的状況の中で一体私達は何を考え、何を問題にし、何を訴えたらいいのかということについて大変悩み、議論したわけです。そこにソーラーシステム研究グループ、土浦青年会議所その他多くの有志が次第に参加しはじめ、様々な議論が沸騰しました。そして、そこで私達が一つの共通の認識に達したのは次のようなことです。

つまり、霞ヶ浦汚染の慢性的状況は生活の中まで浸透し、かつまた、問題の所在は非常に複雑でさくそうしています。したがって、人々がこれに対して具体的にどのような態度をとり、活動するかということは非常に難しい。しかし、湖沼・河川の汚染の問題は国内国外を問わずだれもが気づかないうちに徐々に進行し、深刻化し、そして気づいたときに

はもう取返しがつかないほど慢性化しているのが一般的です。宍道湖・中海のように、湖の将来がある程度その周辺の人々の決断にかかっているような湖はむしろ非常にまれな貴重な例外です。したがって、霞ヶ浦の状況を論じることは湖沼・河川開発のかかえているごく一般的な問題を論じることになるのではないかと。また、さらに霞ヶ浦は湖沼・河川開発の見本市の観を呈しております。そして、もう一つは、ここには人間と湖との関係が破綻することによって生じた現象が象徴的にみられるということです。その最も不名誉な現象はアオコの大発生です。幸か不幸か今年は大変雨が多い。そして、台風も度重なって来たために水かさが増したときがありました。1.2m増すということは全水量が2.4億トン増えたということです。これを逆水門の開放によって一時に流し、だいぶ薄まったように思いました。しかし、その後アオコは大発生し、入口のパネルにあったような状況が2週間位前まで続きました。それが、ここ数日の雨によってだいぶ薄まったわけです。これは喜ばしいと思いますが、いずれにしてもこうした状況が構造的に生じるような湖になっているということはやはり悲惨な状況だといえましょう。

こうした次第で、霞ヶ浦を考えるということは湖沼・河川問題の本質を考えることにもなり、また、開発の正体を認識することでもある、そのようなことに私達の意見の一致を見、そこから準備が始まりました。私達は数10回の準備会を開き、3回の全国実行委員会を開催し、そして今日を迎えたわけですが、その経過はゆうに一編のドラマになるほどの内容だったのです。残念ながらここでその出来事を紹介することはできませんが、そこに結集したエネルギーの程度はお手元の「桜川」や様々な資料、手作りのポスター、小林恒吉

先生の原画による手製のカップシャツなどを見ただけでもご理解いただけるのではないかと思います。

さて、以上が今までの活動と準備のおよその経過ですが、次に私達は霞ヶ浦の開発の状況について何を考え、何をしようとしているのか、どのような具体的提案を考えているのかということの説明したいと思います。

先ほど私は、霞ヶ浦は開発の見本市のようだと言いました。これは決して大げさではないのです。現段階で動いている事業は霞ヶ浦開発事業、水源地域整備事業、霞ヶ浦用水事業、霞ヶ浦導水事業、このような多様な事業が同時並行的に行われています。殊に、導水事業は湖と2つの河川を連結して、これを一大水源として利用しようという大プロジェクトです。このような計画は世界のどこにもないと言っていいと思います。

したがって、この状況をよく見るということは、湖沼・河川の実態を把握するには絶好の場であると思います。これらの開発の目的は、淡水の広域的利用にあります。この目的達成のために、次のような開発活動が行われています。まず、コンクリートによる築堤工事、逆水門の操作、それによって淡水を確保する。そして、これを十分に管理し、合理的・能率的・経済的に利用する。このような図式的理想的な形態は何であるか、それは湖のロボット化ということではないかと思います。

ロボットとは人間の欲望達成の為の道具です。理想的なロボットとは、人間の命令を無抵抗に、無際限に、無限に受入れ、これを実行する力をもつものです。現代の人間は豊かで便利で安全で合理的、効率的、経済的であることを善であると考えます。そして、その実現に熱心ですが、そのような欲望達成のためにさまざまなエネルギー・力・人的資源を結集し、システム化して我々の周囲をとりま

く有機物・無機物をロボット化しようとする力が働いています。このような力が湖に向けられた場合、湖のロボット化というものは必然的な結論であるかもしれません。

私はここに「生命ロボット」と「無生命ロボット」という概念を提出しました。簡単に申しますと、生命ロボットというのは具体的には鶏舎のニワトリのようなものです。これは、卵を産むロボットとして一定の小さな空間に押し込められて一生を過ごします。しかし、生命ロボットは理想的な形態ではありません。というのは、彼らは病気をしたり、エサを食べたり、ときには死んだり、ときには卵を産まなかったりします。したがって、生命ロボットというのは人間の欲望追求の道具としては決して理想的な形態ではありません。そこで、私達の欲望はどうしても生命ロボットから無生命ロボットへという形式をとるに至ります。湖もこの図式に則って生命現象としての活動は破壊されます。湖の周辺ばかりか、遠く山間の小さな村の溝や田舎のたんぼの水路に至るまで直線的な壁につくり変えられ、こうしたことによって生命はその活動の場を消失するわけです。

見るところ、宍道湖・中海もすでに築堤工事は終わっています。したがって、これをロボット化するための最終的な仕上げは水門の閉鎖だけです。これが閉鎖されれば、湖は閉鎖された状況下で生きてゆかなければなりません。つまり、無生命ロボットとして存在することを強制されるわけです。

今年の8月1日に開催された茨城県主催のシンポジウムの中で、近藤二郎日本学術会議会長は「水草の刈取り機」を紹介しました。これは水陸両用艇であり、まず夏のうちに完全に水草の上を刈ってしまい、そして冬になるとうまい具合に根こそぎ水の中から取ってしまうという道具です。彼はシステム工学の

権威だそうですが、その権威らしく生命を無生命に変えることこそ自然の利用の最善の方法であると考えているようです。

生命はしかし、無生命ロボットに変えられることに対して反逆します。それが汚濁という現象として現れるのです。アオコは人間に対する生命ある湖の反逆の現象の現れであるというふうに解釈することもできましょう。私達は湖をロボット化しようとする開発の理念に対してははっきりと挑戦しようとしています。その挑戦のシンボルが〈河童〉です。私達事務局の人間は今日、みんな手作りの河童のTシャツを着ています。河童の登場はさかさ唐突に聞こえるかもしれません。しかし、その理由は次のようなものです。

まず、生命は絶対にデータ化できないということです。次に、自然界は人間の論理だけで動くものではないということです。

生命はデータ化できないということは、一例をあげれば次のようなことです。私達医者は目の前に患者が来ると血液を採ったり、写真を撮ったり、血圧を計ったり、聴診したりときにはコンピュータトモグラフィをとったりします。そして、そのようなデータに基づいて診断・治療を行なうわけです。しかし、それはあくまで一時的な生命現象を側面的にとらえたにすぎないのであり、決して生命全体をとらえたということではありません。生命あるいは人間の性格・精神は決してデータ化できないものです。しかし、ともすると科学者の中には生命をデータによって理解しようとする傾向があります。存在するものを分析し、データを集積することから生命を理解しようとする努めるわけです。しかし、このような考え方は重大な欠陥を含みます。つまり、動く生命としてのそれを全部切捨てるわけです。

次に自然界の不条理性について申し上げま

す。この人間の論理を追求していくと自然界における他の生命は破壊されます。そして、自然は破綻に瀕します。これは、霞ヶ浦を見れば十分に理解できるのではないのでしょうか。霞ヶ浦開発事業というのは、莫大な資金を投じて国家的な事業として行われたものです。決して人間を不幸に陥れよう、湖を破壊しようとして計画されたものではないでしょう。しかし、ここには人間の論理しか働かなかったわけです。そして、人間の幸福のためその論理を湖に当てはめて開発したところが結果的にこうした状況になったわけです。つまり、人間の論理を追求することが自然を破壊しつまりは人間を不幸にするというまことにおかしな状況が生じたのです。これは、自然界は不条理であるということを理解しなかったところから生じた一つの不幸です。

〈河童〉というものを生み出した精神は明らかに、この自然界は決して人間のためだけに存在しているのではない。人間の論理は通用しない世界があるということをよく知っていた、そういう知恵をもっていたということです。その精神は人間のあらゆる生命の一つの現れにすぎない、人間だけがここに生きているのではない、すべての生命、すべての無機物も一緒に呼吸している、こうしたことを当然として受け取っていたのです。例えば魚をとる、土をいじる、水を使う、これは人間の生命活動としてやむを得ないことです。しかし、一昔前の私達の祖先の間には、そこにありがたいという感謝の念がありましたし、また、ここまで使っていいんだらうか、このように魚を食ったり肉を食ったりしてもいいのだらうかというおそれがあったわけです。「針」のような無機物を使う場合にも「針供養」を行った、そうした無機物に対するおそれと感謝もあったわけです。それが様々な祭りや水神伝説、あるいは河童伝説として伝わ

ってきたわけです。このような精神は、あらゆるものを人間の道具としようというような現代の精神とは激しく対立するものです。私達はもう一度、この河童伝説を生み出し、私達に伝えてきたそうした人々の精神を見直し決して人間の論理だけで動いているのではない、むしろ人間の論理は人間の間にはしか通じないのであって、それ以外の世界は人間から見ると不条理の中で動いているということをもう一度認識する必要があるのではないかと思うわけです。

ところで、河童はこのような理念的なものとしてだけとらえるばかりではなく、もっと具体的なものとして考えることもできます。例えば、森と沼との保護というようなことを考えてみましょう。河童の棲みそうな森と沼あるいは湧水池は、つい最近までそれぞれの地域にとって非常に重要な役割を果たして来ました。このような沼や森などは今は惜しげもなく潰されて様々な用に供されていますが、私達はこのような身近な自然に重大な関心を払うべきです。というのは、そこには確かな地域の水循環があるのです。そしてまた、精神の循環もあるのです。子供をその沼に連れて行き、釣りをし、散策をし、夏にはこれを泳ぎ、また水草をとる、そういうことによって動物、植物、昆虫そして人間との間の精神の循環が行われるのです。また、そうした水を田畑に使用することによって生活の循環にもなるのです。こういった森と沼、小さな水循環を大切にすることから、あるいはまた、これを再生するということが成功すれば、何も非常に遠いところにダムをつくり、深いところに巨大なトンネルを掘り、そしてこれを大都会にひいてこれを利用するといった広域的な水利用計画は必要なくなるのです。

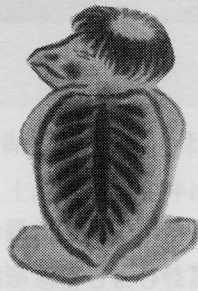
このようなことから小さな森や沼、湧水池の保護ということは水問題の本質にふれる大

切な問題です。河童の棲む沼を守るということ、このようなことは一見バカバカしく思えますが、実はこのような考え方の中にこそ失われた水文化の芽があり、水の哲学の基盤を形成するための一つの重要な鍵があるのではないかと考えます。私達が河童を登場させたのは、すべてが人間のためにある、すべてが人間によって論理化できるとするうぬぼれに対するアンチテーゼとしてなのです。

人間のエゴイズムに基づく論理の展開によって生じたものがアオコであるとすれば、私達はそのような人間中心主義の開発に強く反省を迫り、自然と人間との本来の形での共存の理念を生み出す必要があるでしょう。これが、私達の目指す水哲学の創造であり、水文化の再生につながる道であると信じます。この会場に参集した皆さんが、人間と湖との関係について新しい視野を開拓し、真に自然と人間とが共存できる手がかりを見い出してくれば幸いです。

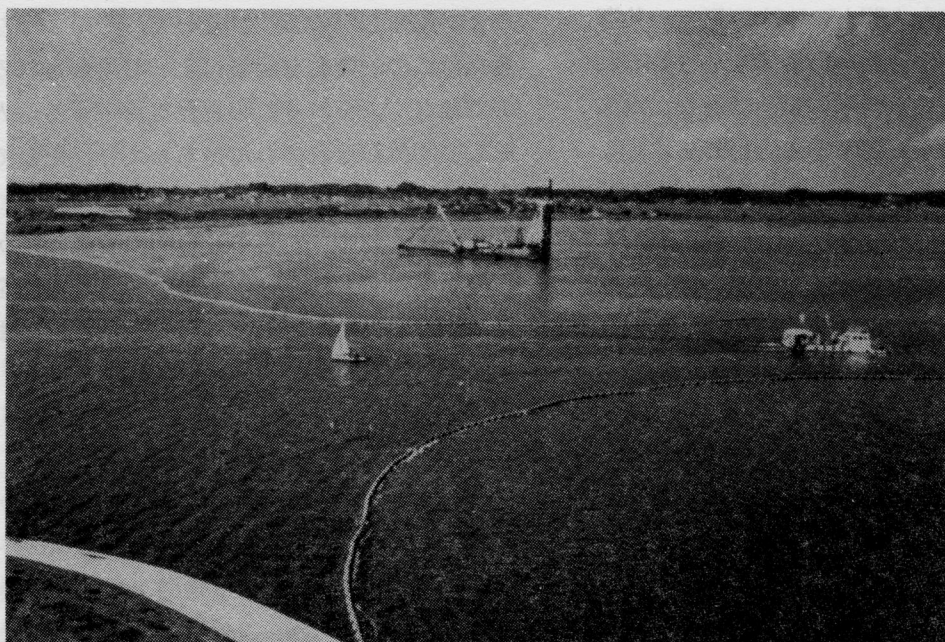
最後になりましたが、皆さんに一つお願い

があります。それは、この会議の性格についても一度思い起こしていただきたいということです。この会議は僅か2日です。そして素人がつくった小さな会議です。この会議は何らかの特定の主義に基づいて開催されたものではありません。自然と人間とのよりよい関係のあり方を探ろうとする人々が、何らの報酬も求めず、権威にも頼らず、自由な意志のもとに一同に会し、様々な討議の中から明日の活動のための一つの視野を開くための集いなのです。したがって、この会議においては自由な発想に基づく様々な意見が飛び交うことが望ましいのです。そして、そのような意見はこの一時的な会議によって生かされるのではなく、それぞれの意見を肯定する個人、そして団体がそれぞれに持ちかえり、そして今後に行動する際の指針にさせていただきたいと思えます。これからの2日間の会議の中から何か一つでも確かな、未来につながる光を見い出していただければ幸いです。



霞ヶ浦からの報告

座長	……………	田谷 利光
報告者	商人の立場から……………	保立 俊一
	漁業者の立場から……………	桜井 謙治
	農業者の立場から……………	岡田 行雄
	霞ヶ浦の地勢及び開発の状況……	原田 泰
	市民運動……………	奥井登美子



アオコ
フェンス

新川にア
オコがそ
上しない
ように4
重にはら
れている。

座長 田谷利光（土浦協同病院農村健康管理センター長）

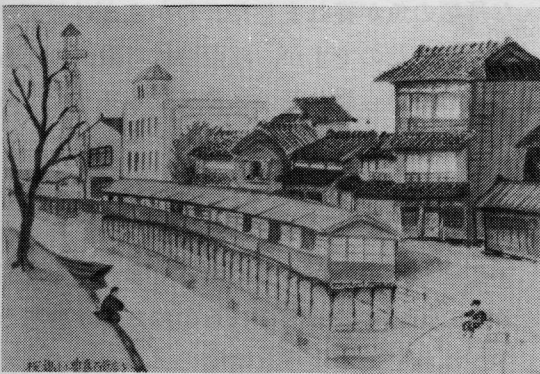
霞ヶ浦の汚濁については富栄養化や水ガメ化ということが言われていますが、私が医者としての立場から考えますと、300万人を越すと言われている糖尿病（原因は栄養過多・運動不足・ストレス）と非常に似通ったところがあると思います。その意味で私達は富栄養化防止条例のもとでできるだけ浄化に努め

ているわけです。この状態に至るまでの事情を、ここで、長い間霞ヶ浦の沿岸に住んでいた人たちの生産的な立場、あるいは生活の面からご報告をお願いしようということで、非常に迫りに満ちたお話しが皆さんに伝えられるわけで、大いに期待して戴きたいと思いま

霞ヶ浦の水運と食文化

土浦の自然を守る会 保立俊一

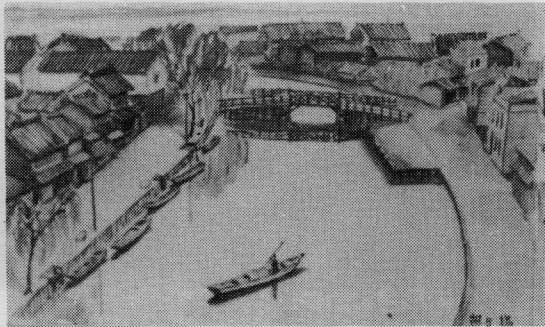
土浦のまちが水郷という名に恥じないまちづくりであった大正時代を中心として、そこに住んでいた人と霞ヶ浦との関わりあいはどう変わってきたかということについて話したいと思います。(以下、スライドを見ながら)



(1)

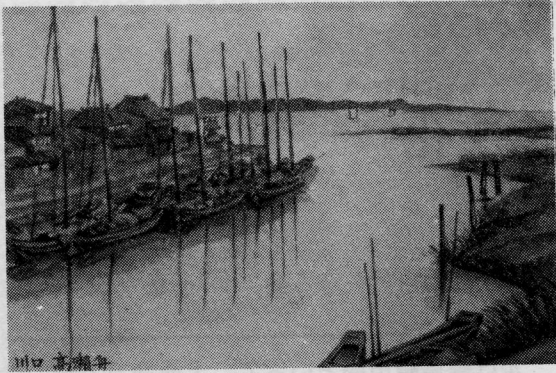
写真(1)は、大正末期の土浦です。真中を通っているのが川口川です。この川は鬼怒川水系で、霞ヶ浦に入っていたものと桜川の本流でした。それが、土浦にお城ができ、集落ができた、その時点で洪水防止のために桜川をまちの外側を通すように変えました。大正時代まではこの川口川が土浦城の外堀的要素をもち、また、この川から細い水路がまちの中を縦横に走っていました。そして、船でどのまちへも行けるまちでした。岸には柳の木が植えてあり、非常に良い環境でした。この右はじが私の家で、その前は徳川幕府の直轄工事で造った陸前浜街道が通っていました。この絵は桜橋の上から描いた絵です。左のビ

ルは豊島繭市場といって、土浦地方で繭の生産が盛んだった明治・大正時代、農家が現金収入を得るために生産した繭は荷車でこの市場へ運ばれました。また、川沿いの農村からは船を利用して繭が運ばれました。この市場の取引高は全国でも1~2位でした。そして、繭を運んで来た農村の人達は、私のところで魚屋とめし屋をしてましたので、刺身とあら汁と御飯を食べました。それが非常な御馳走であったというような時代でした。彼等は海の魚などは年に何回も食べられなかったのです。



(2)

写真(2)は、土浦が水郷と呼ばれた頃の川筋です。江戸時代に陸前浜街道の両側に町屋が造られ、商業が定着しました。土浦の商業が発達したのは250年位前、江戸中期のことで、それ程古い昔ではありません。そして、土浦の商人は霞ヶ浦と川を利用することによって発展していきました。



(3) 高瀬舟

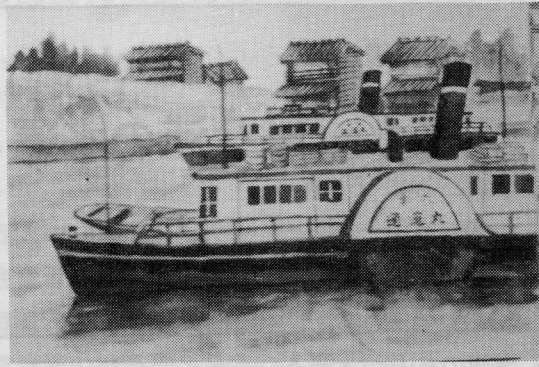
(3)(4)の船が「高瀬船」です。京都の高瀬船とは意味が少し違いますが、荷物を運ぶ川船として理想的な船でした。60kgの米俵300～500俵を積んで土浦から江戸へ利根川を運んでいました。江戸からは日用雑貨品や江戸の文化を土浦へ運んで来たわけです。これは、大正時代まで運行されていました。明治29年に常磐線ができましたが、それにも負けずに就航していました。



(4) 高瀬舟



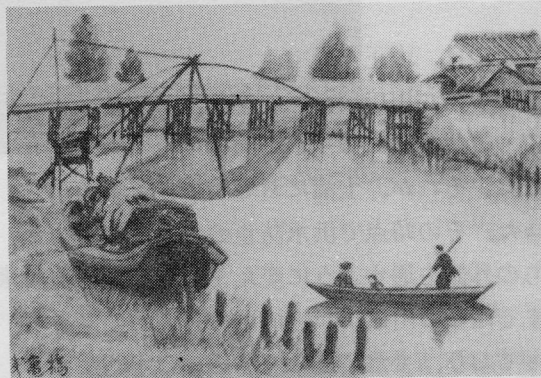
(5) 焼きわかさぎ



(6) 蒸気船

明治20年頃に外輪船の蒸気船が霞ヶ浦に就航して東京と土浦の間、銚子と土浦の間を荷物の運搬や人々の足として運行されました。

霞ヶ浦には海との交わりがあったので色々な種類の魚が獲れました。わかさぎは最初はいなかったのですが、江戸時代に諏訪湖から移入してから霞ヶ浦の名産になりました。わかさぎは道路端で焼いて「焼きわかさぎ」として売られていました。写真(5)。霞ヶ浦で獲れたエビやしらうおなどは、道端にむしろを敷いてその上で乾かしていたのです。川岸を通ると、川風によってそれらのおいごまちの中を流れているような情緒のあるまちでした。



(7) 舟遊び

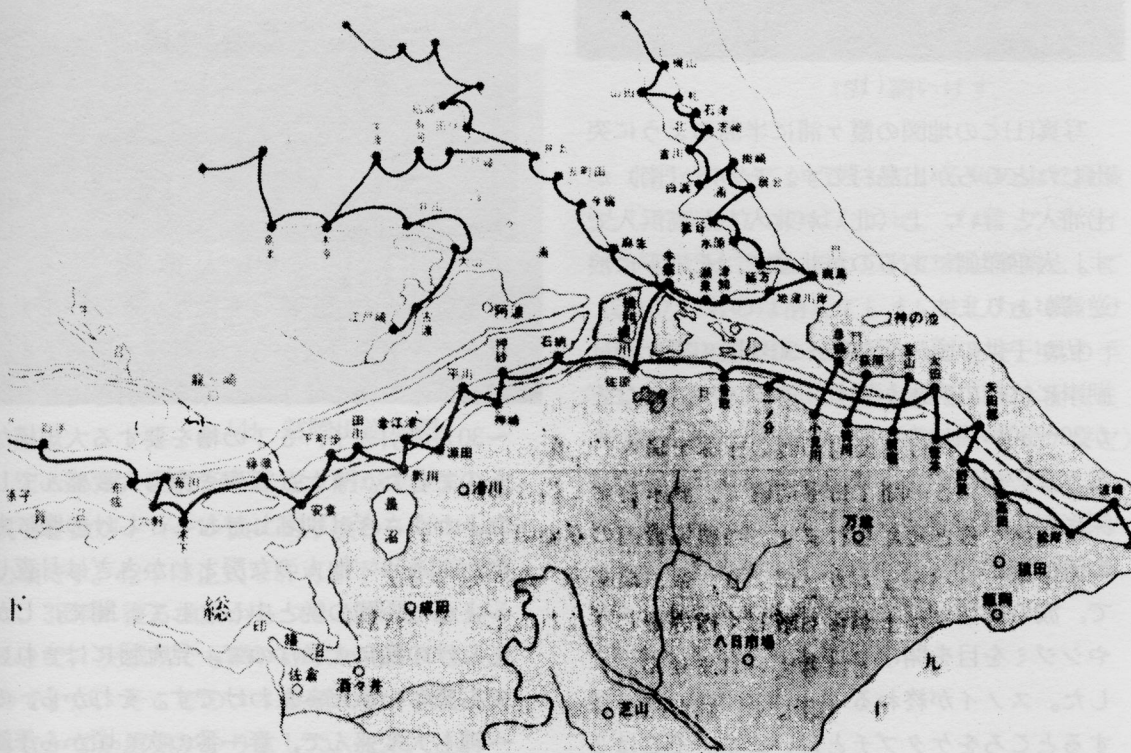
子供達と水とのふれあいはまちの中を流れている川で行われました。私が泳ぎを覚えたのもこの川です。そういう関係がなくなってきたのは昭和に入ってからのことです。

昭和8年に失業対策事業として川の埋立てが行われました。これらの川は全部埋立てられ、道路になり、商店街になりました。現在の土浦のまちの中では川の痕跡は一つも見ることできません。川を使った交通もそれに伴ってだんだんなくなっていきました。それでも、昭和20年代までは土浦市民と霞ヶ浦とのつながりは深く、湖畔には砂地があり、水泳場がたくさんありました。しかし、昭和30年代に入り35年に霞ヶ浦開発事業によって湖

の廻りがコンクリートで固められ、そして38年に逆水門ができて海とのつながりがなくなってしまいました。そのことによって、流れのないたまり水になってしまった霞ヶ浦が汚染されるのに要した時間は非常に短かったです。39年に逆水門が閉まり始めると、42年には遊泳禁止、45年には全面的に遊泳不可能な水になり、現在のアオコの水になってしまい、市民との関わりが全部なくなってしまったのです。

蒸気船通運丸運行図

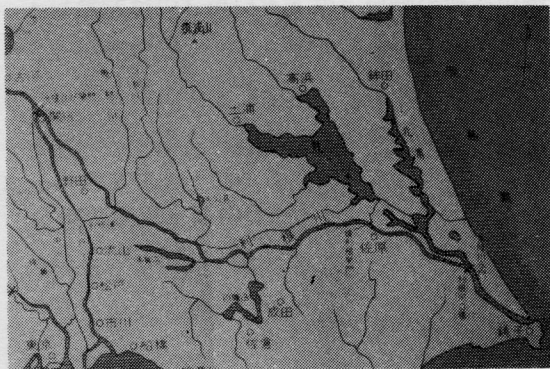
明治中期～昭和初期



霞ヶ浦は変わった

出島漁協 桜井 謙 治

私は昭和14年に出島村牛渡で生まれました。30戸程の部落ですが、大変に漁が盛んでそのうち22~23戸が漁業者という部落です。



(1)

写真(1)この地図の霞ヶ浦に半島のように突出したところが出島村です。その下(南)が土浦入と言ひ、上(北)が北入とか高浜入です。太平洋側にあるのが北浦で、その下に浪逆浦があります。

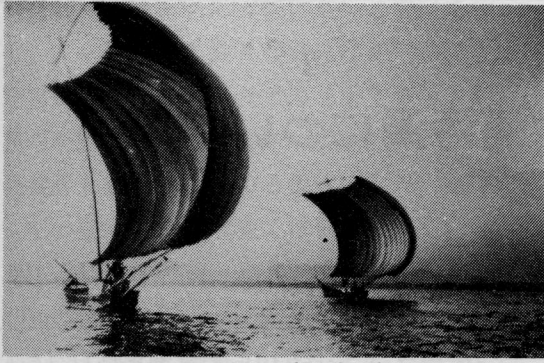
私が子供の頃、昭和20~30年頃の霞ヶ浦は、湖岸には柳の大木が繁り、ヨシ・マコモなどが20~30m幅に生い茂っており(「ヤワラ」と言う)、そこをくぐり抜けていくと、膝位の深さから「スノイ」になり、そこが子供の頃の遊び場だったわけです。砂は非常にきれいで、波の模様がくっきりとついていて、エビやシジミを目を開けたまま採ることができました。スノイが終わる100m位沖合の泥と接するところをケタブチと言ひます。そこは2ひろだち、3ひろだちのところですが、そこでも底のカラス貝をすくい取れる程の透明度

がありました。魚の種類は、ワカサギ・シラウオが有名ですが、海から上がって来る魚ではウナギ、ボラ、サヨリ、セイゴなどが主なものでした。セイゴは非常に味が良く、東京の市場でも評判でした。あとはとても言いきれませんが、100を越える生物がいたと言ひられています。



(2) 大徳漁

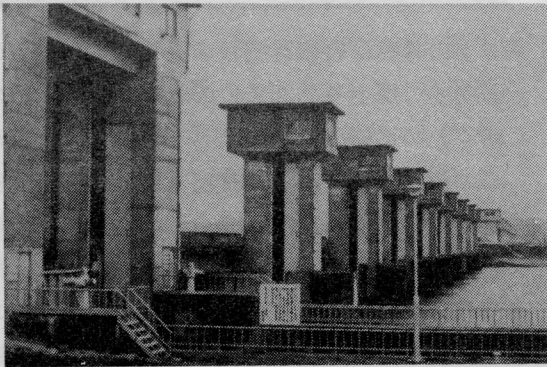
どういふ方法で獲っていたかと言ひますと、(スライドを見ながら)これが大徳漁です。数百ひろの網を4丁のかぐらで引き寄せ、20~30人の引き子、5丁の櫓を要する大規模なものでした。また、帆曳き漁も大変盛んでした。わかさぎ(別名しけむしーしけの晩に大漁がある)一他人の女房とわかさぎは月夜じゃとれない闇の晩と申しまして、闇で、しかもしけの晩に大漁なので、見た目にはきれいで厳しい漁だったわけです。それから、のべ縄も大変盛んで、春一番の吹く頃から季節風の吹く頃まで、季節によってエサを変えながら、のべ縄だけで生計が成り立つ程ウナギ



(3) 帆曳き

もたくさんいたわけです。

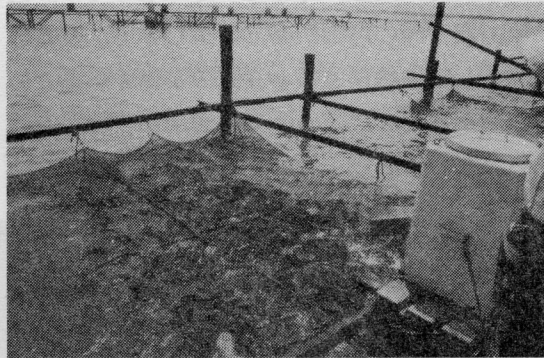
30年～35年頃、浪逆浦でウナギの子（シラス→クロコ→メソ）が大漁で、1貫1万円位のもものが一晩で4～5貫獲れました。当時5年程そこで漁をしましたが、水門が閉まる前だったので大量の水が（海から）霞ヶ浦に入って来たわけです。月と相談しながら潮だまりをぬって漁をするのですが、大量の水が上げ潮・下げ潮で霞ヶ浦に出たり入ったりしていたのを目にしていたわけです。



(4) 常陸川逆水門

ところが、昭和38年に逆水門ができました。帆引き漁がトロール漁に切り換わったのもこの頃です。42年に正式な許可が下りました。また、38年に獲る漁業からつくる漁業へということで、茨城県でも網いけすが免許になったのですが、そこでのコイ養殖に切り換えるにはなかなか勇気がいりました。それでも、一生懸命やっているうちにいつのまにか全国一の生産を誇るまでに発展したわけです。とこ

ろが、48年、ちょうど水門が完全に閉鎖をされると言われた年に想像もしなかったアオコの異常発生により霞ヶ浦全体に酸素がなくなり、7月14～16日の3日間で高浜入の200面程の網いけすが全滅しました。それで、これは水門の影響で水が腐ったのだということで、水門開放の運動が起こり、国会、県庁に請願・陳情を繰返したのですが、水門を開けるまでには至りませんでした。そして、その運動は1～2年の間に補償金というかたちで消されてしまいました。



(5) 網いけす

水門ができてから残っている魚の中で漁業として成り立つのは、エビ、ゴロ、アミ（イサザ）だけです。それ以外の魚は漁業として成り立つものは消えてしまいました。網いけすは汚濁の原因になるということで、県の手によって6000面位あるものを4000面位まで減らし、コイに代わる魚種（テラピアなど）に転換するということが今努力中です。しかし、総合開発が進む中で、水質の低下によっていつまた48年のようなことが起こらないかという不安な毎年を迎えています。

蓮根、養豚と霞ヶ浦汚濁について

出島農協 岡田 行雄

出島村は、農家戸数が62%という純農村地帯です。その中で、農協としては水稻を中心として園芸、果樹、畜産等を振興しながら、農業所得の向上に努めているつもりです。近年、霞ヶ浦の汚濁が非常に進む中で、農業部門としては特に蓮根と養豚の及ぼす影響という問題に関心が高いので、簡単に現況等を報告したいと思います。



(蓮 田)

(スライドを見ながら) 今から15・16年前、霞ヶ浦沿岸は水稻が中心でした。昭和45年の減反政策により、稲作に代わるものとして湿地帯を利用して急激に蓮根の栽培が増えたわけです。当然、(出島)農協の管内でも約300ヘクタールが作付されています。そのうち、農協の共販面積は170ヘクタールで、販売高は6億5千万円、栽培組合員平均で約350万円にもなり、まさに生活の基盤でもあります。そのなかで、蓮根の及ぼす汚濁としては化学肥料等がクローズアップされるわけですが、

一応10アール当たり240kgを基準に植付け前(4月後半)に約70%を耕耘施肥し、残りは7月上旬に追肥しています。

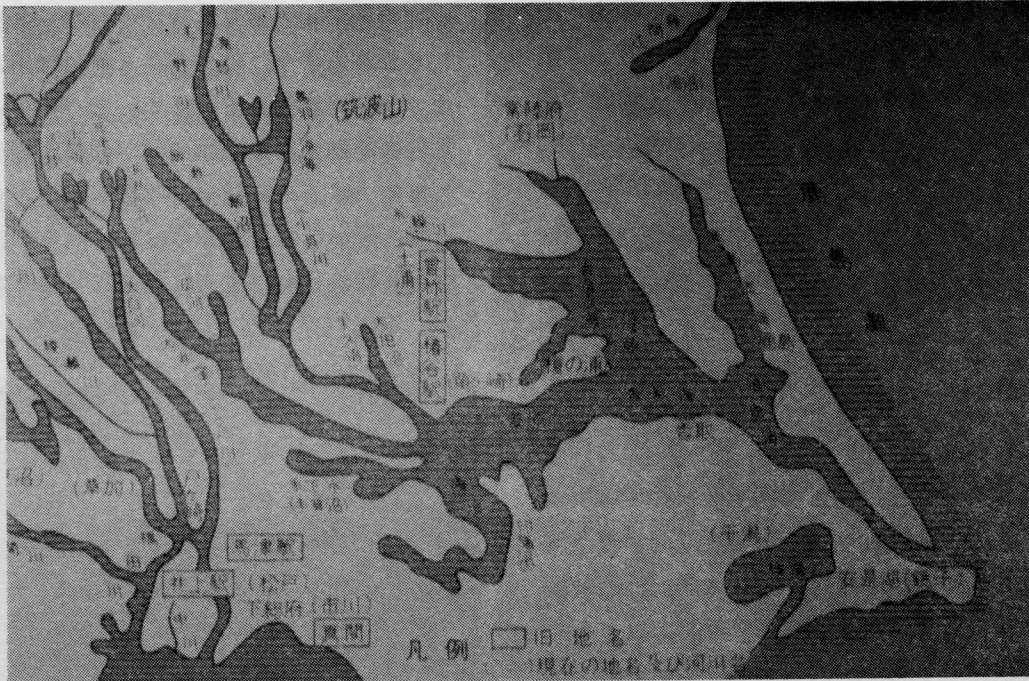


上の写真は有機質肥料を投与しているところです。反当り約30袋位の乾燥豚糞を流出を防ぐために袋のまま施肥しています。肥料成分の流出は、経営上、栽培管理上からも大きな問題です。したがって、このことには全組合員で注意しており、一例を上げれば、「あぜなみ」という塩化ビニールの波板(35センチ・45センチ・60センチ)を圃場の深さに応じて畦道に埋めて、保水、流出防止に努めている実態です。これらの地域は湖岸堤もしっかりしているので、肥料成分等の直接的な流出は考えにくく、また、自然浄化がかなり進んでいると考えております。

畜産については、村内では常時2万5千頭(の豚)が飼育されており、農協管内では1万3千頭、昨年度販売高12億円となっています。管内では昭和54年の1万7千頭をピークとして、後継者不足・価格の低迷等の要因で、

霞ヶ浦の地勢及び開発の状況

霞ヶ浦をよくする市民連絡会議 原 田 泰



(1)

これまで3人の方々に、この20~30年の間に霞ヶ浦が急激に汚れて、周りに住む人達の生活に大きな影響が現われたこととお話しいただきましたが、その原因がどこにあるのかをお話しするのが私の役目です。最初から結論を言ってしまいますと、霞ヶ浦の汚濁の大きな原因は霞ヶ浦の開発にあるということになります。

(スライドをみながら) 霞ヶ浦の位置は関東平野の北部太平洋岸にあり、関東平野の中央を斜めに横切っている利根川の下流にある水たまりであるというように見ることもできます。それをもう少し歴史的に見ますと、霞

ヶ浦は利根川の下流に広がる深く入り込んだ内湾の一部で、現在の利根川の下流のところがかんかん細くなっていき、川の形になっていました。そして、300年位前、江戸時代に利根川の大工事によって、それまで東京湾に流れ込んでいたものが太平洋の方へ流れるように変えられて今のような形になったわけです。(写真(1))

次に、開発の話に移ります。まず、湖の開発とは何であるかといいますと2つありまして、1つは埋立てて土地をつくるということ、もう1つが湖の水を利用しようということです。(2)は、埋立ての実例です。東村の干拓



(2) 干拓地

で、大規模な干拓の典型的な部分です。霞ヶ浦にはたくさんの魚が棲んでいたわけですが、魚たちが卵を産み繁殖する場所はこういう湖の岸边近くの入江や浅瀬の藻がたくさん生えているところだったわけです。水鳥や虫など、多くの生物がここで生きていたわけです。こういう場所は陸上の方から見ても非常に豊かで、埋立てがしやすい場所だったわけです。

もう1つの開発——水利用には農業用水、工業用水、都市用水（水道水）があります。霞ヶ浦の水は明治時代までは周辺ではあまり使われていませんでした。汲み上げるのがたいへんだったということです。明治時代に蒸気で動くポンプが導入されて、まず農業用水としての利用が始まったわけです。現在でも農業用水が霞ヶ浦の水利用の大きな部分を占めています。

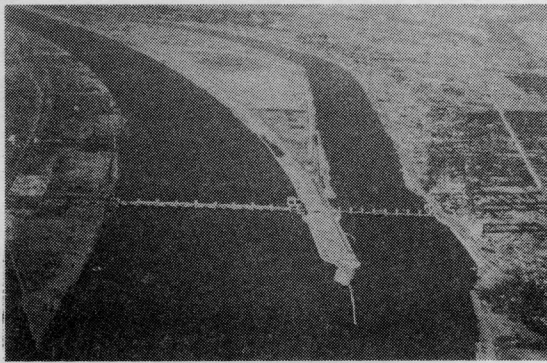
昭和40年代に入り、高度経済成長期に日本は農業国から工業国へ変わり、茨城県南部の工業開発、都市化もこの頃から始まります。

写真(3)は、鹿島コンビナートです。これは、霞ヶ浦のちょうど横腹の太平洋岸に、砂浜を掘り込んで港をつくってできたコンビナートです。港をはさんで手前に住友金属鹿島製鉄所、対岸に三菱油化を中心とする一連の石油化学工業の集団があります。「無公害」と「農工両善」—農業と工業の両方を振興するというキャッチフレーズで建設されました。



(3) 鹿島コンビナート

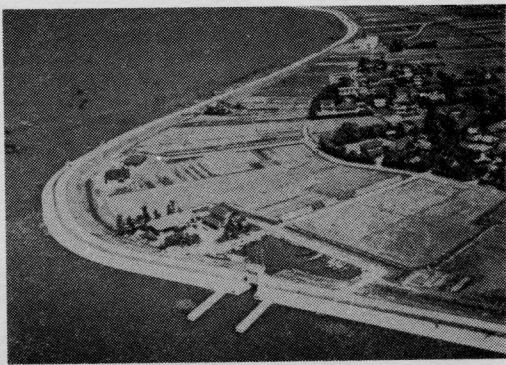
その状況がどういうものかということは、写真を見れば説明するまでもないとおもいます。ここへは北浦から大量の工業用水が汲み上げられています。



(4) 逆水門

(4)は、逆水門を上流の方へ向かって見た写真です。向かって左側が利根川の本流で上の方から流れて来ています。右側が常陸川、この奥の方に霞ヶ浦があるわけです。ここで合

流しており、橋がかかっているように見えるのが水門で全部閉め切ることができます。左側が利根の河口せき、右側が逆水門です。



(5)

(5)の写真のように、霞ヶ浦の湖岸はほとんどコンクリート化されています。逆水門を閉めると霞ヶ浦の水は水位が上がりますが、堤防がなければ水はあふれ出してしまうので、湖岸に堤防をつくって霞ヶ浦全体を大きな貯水池につくりかえてしまったわけです。

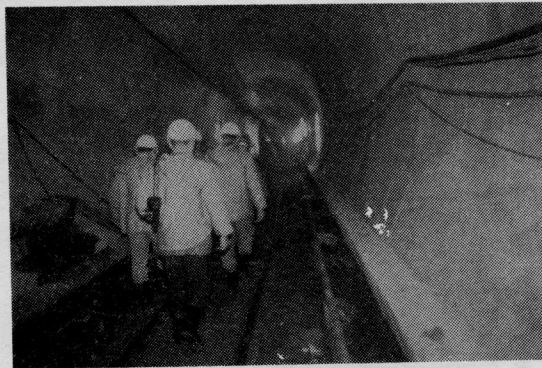
霞ヶ浦の水資源開発というのは非常に大規模な事業ですが、水を利用する開発というのは3つあります。霞ヶ浦開発事業、霞ヶ浦用水事業、霞ヶ浦導水事業です。

(6)の写真は、霞ヶ浦開発事業の計画図で、

(6)

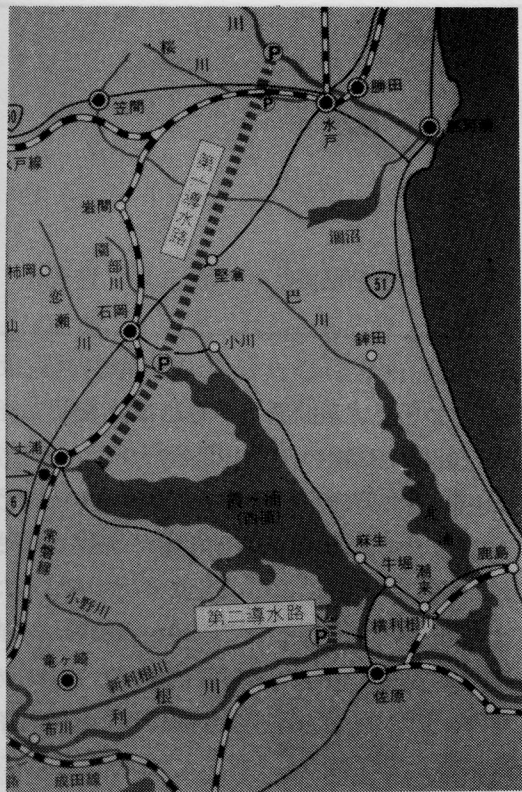


逆水門と湖岸堤で水ガメ化して水を汲み上げようというものです。深い緑色でかいてあるところが農業用水が供給される場所です。工業用水は鹿島と京葉コンビナートに送られます。水道水は霞ヶ浦周辺、鹿島、東京及び千葉に送られることになっています。



(7) 県西用水トンネル

2つめは霞ヶ浦用水事業です。県西用水とも呼ばれますが、茨城県西部の台地へ主に農業用水として水を送ろうというもので、(7)の写真は筑波山のどてっ腹に掘られた導水トンネルの写真です。



(8) 導水事業計画図

ろへ融通しようという計画です。導水事業の目的について行政側が言っていることは2つあって、1つはきれいな水を霞ヶ浦に入れて水質浄化をすること、もう1つは新しい水資源の開発です。導水事業の目的に水質浄化が入っているように、現在行政では霞ヶ浦浄化のキャンペーンというのは非常に大声で宣伝しています。この背景は決してまがいものではなくて、本気な部分があります。大々的に水を汲み上げて利用しようという準備が万端整った矢先に肝腎の水が汚れ出してしまった。商品としての水の価値がさがって売り物にならなくなってしまふ。これを非常に恐れて、市民の善意の問題意識も利用しようという面があることをよく理解していただきたいと思います。

以上、霞ヶ浦の地理的な成り立ち、明治以降人間たち…と言うよりもより正確には政治権力者と財界ですが…がどんなふうに霞ヶ浦を利用してきたのか、そして、これからどんなふうに利用しようとしているのか、そして、開発とセットになった浄化キャンペーンというのはどういう問題があるのかということ概要お話しいたしました。

3つめは霞ヶ浦導水事業で、南東北の大河である那珂川と霞ヶ浦、関東地方の利根川と霞ヶ浦をそれぞれ導水トンネルでつなぎ、巨大なポンプを設置して水を自由にいたるとこ

<霞ヶ浦用水事業による水需要>

(単位：m³/秒)

用途別	最大送水量	備考
水道用水	0.58	給水人口 292,000 人
工業用水	1.06	最大 85,000 m ³ /日
農業用水	17.76	かんがい面積約 21,600 ha
計	19.40	

<導水の使用先>

(単位：m³/秒)

用途別	霞ヶ浦導水事業				計
	茨城県	千葉県	東京都	埼玉県	
水道用水	6.60	1.26	1.40	0.94	10.20
工業用水	2.10	0.40	—	—	2.50
計	8.70	1.66	1.40	0.90	12.70

— 茨城県環境局資料より — (62年, 3月発行)

市 民 運 動

土浦の自然を守る会 奥 井 登美子

長い間、茨城は住民運動や市民運動、消費者運動の不毛の地だと言われてきました。私も東京からこの土浦へお嫁さんという形で入って来て、最初は驚く事ばかりでした。まちの中全体に何か大きな力に反抗しても無駄という、あきらめの早さのようなものがありました。それがどこからきたのか最初はわからなかったのですが、よく考えてみると、この地帯は洪水の常習地帯なんです。徳川幕府は利根川の改修においても常に江戸の方を有利に持っていくために、北側の茨城県側は不利でした。洪水があると、茨城県側の堤防が切れていたわけです。それで、利根川の下流地帯の水害常習地帯の人々は、いつもいつも何か大きな力に対して反抗しても無駄だという気持ちが一つの県民性みたいになってしまっているのではないかと思います。その上、保守性の強い農業県、市民運動が不毛であったというのともわかるような気がします。その中で、昭和46年にまだ29歳だった佐賀先生が近所の主婦などを集めて「土浦の自然を守る会」を結成しました。霞ヶ浦からアオコを取って来て金魚鉢に入れ、駅前常陽銀行のところで皆さんにアンケートをしたわけです。「命の水を守る」というキャンペーンでした。2300名分のアンケートを集計して、私達は11項目の“まちの人の考えた”霞ヶ浦水質浄化のための提案事項を環境庁や県、市へ提案しました。そのときに私が耳にしたのは、「女がそういう水の問題などに口出すなどと

いうことはありえないから何か黒幕がいるに違いない」「水問題というのは高度に政治的な問題で利権のからむ問題だから、あまり口出ししない方が身のためだよ」というようなことです。私はそのときまだ子供が小さくて、この子供にこの水を飲ませて大丈夫だろうかという母親としての何か動物的、本能的な不安感から私は水問題に参加したわけですが、そういう母親としての何か動物的な不安感みたいなものも「言うてはいけない」、「そういうことに女が口を出すものではない」と言われたのが非常に印象的でした。昭和48年の「市民が考えた11項目の提案事項」は、そのときはいたるところから気狂い扱いされましたが、十数年たった今、原則として間違っていないということに確信をもっています。市民の目というのはお役所の人や政治家の考えた目よりも意外に確かなものを持っているのではないかということを感じます。何で市民が確かな目を持っているかと言いますと、市民は色々な職業の人が集まってしかも、真剣に生活に直面しているのです。生活体験の重みと生活実感のたしかさは霞ヶ浦を糧にして生きてきた人たちにはかないません。お役所や政治家や大学者などおよびもつかないほど深いものなのではないでしょうか。「高浜入干拓の中止」ということが11項目の提案の中に出ています。私達は減反が進められる中では農地よりも水源地の方が大事ではないかということでこの項目を入れた

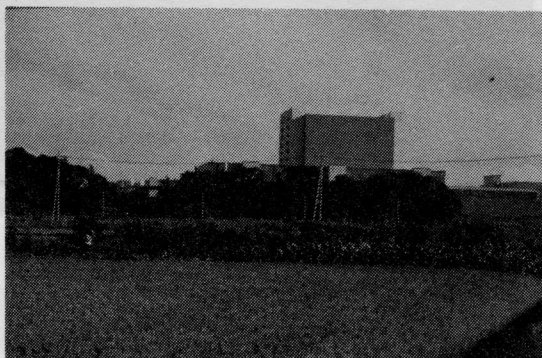
わけですが、そのために県会が大もめにもめまして色々紛糾があったわけです。しかし、まもなく高浜入干拓は中止になってしまいました。やはり、時代と共に価値観が変わるということをよく考えていただきたいと思います。

もう1つ、市民の方が確かな目を持っているのではないかと思われる問題は、昭和55年に美浦村の木原というところ（霞ヶ浦の水道水の取水口になっている）に大規模な半導体工場が出来1日1800トンの排水が、許可されました。私たちは、色々調べてみました。半導体工場の排水については、皆さん「シラン」というのを知ってますか？「シランなんていうのは知らんよ」という人が多いのではないかと思います。このシランをはじめ色々な化学物質が半導体工場では使われます。今までの常識では考えなかった化学物質、たとえばヒ素化合物、ヒ素などというのは、薬剤師としても非常に怖い化学物質ですが、今、半導体工場でこのヒ素をかなり使っています。

そのときに相手の会社に対して、私たちは「会社が出て来ること自体は反対ではない。是非出て来てほしい。しかし、霞ヶ浦の水は非常に厳しい状態であり、水を飲むことに対して不安を抱いているのだから是非、クローズドでやっていただきたい」と誠意を持って話し合いました（そのときに私たちと村との間で話し合いを進めてくれた村会議員さんは今、村長さんになっております）。

今、半導体工場の排水問題が、シリコンバレーなど世界的に問題となっているときに、霞ヶ浦ではいち早く会社の誠意によってクローズドを実現しました。現在、半導体工場の排水で問題となる化学物質の数は、昭和大学医学部の山口ひろし先生の説によると148種類もあるのです。それを、クローズドでやっていただけたということは大変良かったと

思いますし、住民運動の力でクローズドにしたというのもこのテキサス・インスツルメントの会社が初めてだったと思います。

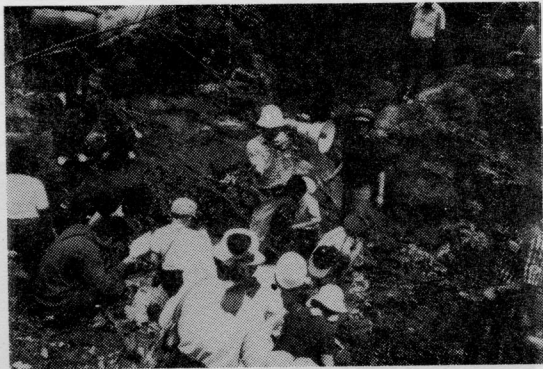


(1) テキサス・インスツルメント社
(スライドを見ながら) これは、テキサスの会社の社屋で、排水の施設は、当時のお金で10億円以上かかったと言われている素晴らしい施設です。

56年に霞ヶ浦をよくする市民連絡会議を結成し、「富栄養化防止条例」ができる直前に市民だけの力で非常に広い霞ヶ浦流入河川の水質調査をすることにしてました。



(2)
(2)は、第5分科会の森君がドラえもののぬいぐるみを着て、駅前で水質調査の費用にするためのステッカーを売っている写真です。



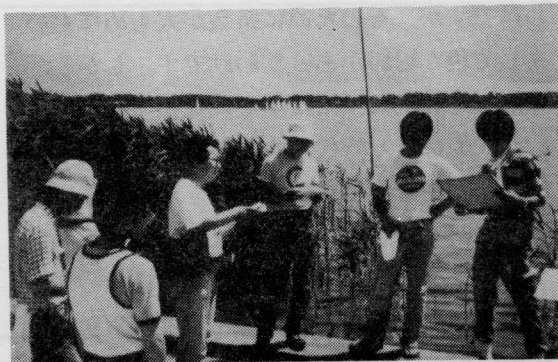
(3)

(3)は、市民の手による水質調査の予備調査で、子供と大人184人が参加してバスで筑波山のすぐ下の白滝へ行ったときの写真です。



(4)

(4)は、富栄養化防止条例に向けて市民の意見を是非聞いていただきたいということで知事に色々質問しているところの写真です。



(5)

(5)は、市民の手による水質調査で霞ヶ浦のすぐへりの桜川の河口で調査をしている写真です。この水質調査などを通して、市民と科学との関係について考えますと、今の時代は、私たち市民が科学的なものを求めようとする、科学というものがどんどん市民の手の届かないところへ行ってしまいうわけです。このような市民の手による水質調査なんてくだらないと思われるかもしれませんが、なんとかして科学というものを私たちの手の届く範囲にとどめておきたいという思いを込めて5年間続けてきました。“水を科学的にとらえようとする市民”そういう市民がこれからもどんどん増えてくることを期待しております。

ま と め

座長 田谷利光

5人のレポーターの報告を終わりましたけれども、皆さん方いかがだったでしょうか。保立さんの大正時代からの悠々たる人と霞ヶ浦、そういう人と水との共存の状態から急速に霞ヶ浦の状態は変わって来て、漁業者にしても農業者にしても商人の方にしてもここに

住んでいる人達がそれぞれ非常に困っている状態になって来ているということがお分かりいただけたかと思います。国立公害研究所の報告によりますと霞ヶ浦は湖の中の動植物の死があるいは流れ込む土砂によって約800年後には湿原状態になるということを目撃し

ているようですが、まだ800年といえばずっと先のことです。現実には今の霞ヶ浦と一緒に生活している私たちがこれからどう生きのびていかなければいけないかということになるのではないかと思います。これからの分科会を通じて明日皆様方の大きなご討論をいただきたいと思います。

最後に座長として、牛久沼のほりにお住まいの住井すゑ先生の言われた言葉を引用して終わりにしたいと思います。「水をいとおしみ、土をいたわり、火を敬う、この気持ちを忘れてはだめだよ」と言われております。それでは、この霞ヶ浦からの報告を終わりたいと思います。

市民の手による水質調査 5年間の総評

私たちは5年間で、地域に密着したグループが、地域を詳しく調査し、しかも霞ヶ浦流域や他の流域全体を意識して一つの調査団を形成するという珍しい形の調査を実行することに成功してきました。とにかくこれだけの広い範囲を、これだけ詳しく、これだけ大勢で調査したことは、十分に誇れることといえます。世界的に見ても例がないでしょう。調査により私たちは水を実感としてとらえることにも成功しました。調査した水は河川、湖沼ばかりでなく水路、井戸、泉、排水口などにもおよんでいます。意識の面でも私たちはあらゆる場所のあらゆる水に関心を深めたといえそうです。皆さんも出かけるとつい川などを観察してしまうのではないのでしょうか。以下はこのような調査をつうじてわかってきた水の実態です。

市民の手による水質調査 5年間

年	調査期間	試料数	参加人数	備考
1982	8月2日から8月18日	202	167	初調査。条例施行直前。採水班と拠点に常駐する分析班で行う。
1983	7月30日から8月22日	229	130	採水班を地元の人中心にする。小野川などでし尿処理場の影響の大きさに気づく。県へ要望書提出。
1984	7月29日から8月13日	261	117	1河川あたりの調査地点数増加。流域内4し尿処理場排水に注目
1985	8月1日から9月1日	188	195	地域グループによる化学分析。調査地点精選。牛久、水戸方面の参加。北浦グループできる。子供文庫、真鍋小学校郷土クラブ参加。
1986	8月2日から8月31日	203	253	子供用解説を試用。恋瀬川、山王川、美浦に新グループ。5年間のまとめ。